

# 須田剋太をめぐる、船戸安之の水替無宿の詩について

渡 辺 恭 伸

司馬遼太郎の『街道をゆく』シリーズでは、「佐渡のみち」の取材で1976年に佐渡を訪れている。

同行して挿絵を描いた画家・須田剋太（1906—1990）は、埼玉県鴻巣市の出身であり、旧制熊谷中学校を卒業している。僕は須田剋太の生家近くに住み、熊谷高校（もと旧制熊谷中学校）に通った、はるか後輩にあたる。須田剋太の事績を伝えるために結成された「須田剋太研究会」に属し、須田剋太が描いた絵の風景を訪ねて旅してホームページに整理するというものもしている。そんな旅をすると、時の変化や、須田剋太の絵の特質や、いろんなことが見えてくるが、佐渡では想定外の展開があった。

2013年9月に『街道をゆく』の「佐渡のみち」をたどって佐渡金山に行った。

金の採掘場からすこし離れた山中に水替無宿の墓がある。深い坑内での作業のために湧き水をたえず汲み上げなくてはならないので、江戸などから強制的につれてこられた人た

ちが働かされ、水替無宿といわれた。過酷な作業のために短い年月で死を迎えた。

墓の脇に案内板が立っている。一部の文字が欠落している。読めないところがあるのだが、そこに詩らしい一節があった。

「○ずかな時間で減んだ

君ら、穴ぐらしの過

○未来を圧せられ、五

年ともたなかつた、

.....」

○のところは文字が欠けていて、あとの行も脱落している。

僕は熊谷高校在学中、国語を船戸安之先生に教わった。



水替無宿の墓の案内板 2013年9月

船戸先生が佐渡の水替無宿の墓に行き、そこで作った自作の詩を、授業のときにきかせてくれたことがある。その詩を一字一句正確に覚えているのではないが、詩のリズム感とか早い死を惜しむ哀悼の気分とかが印象に残っていて、その案内板の一節が、40年前にきいた先生の詩のように思えた。

佐渡から帰ってから佐渡市の文化財担当（佐渡市世界遺産推進課文化財室）にメールで問い合わせると、案内板を作ったのは佐渡観光協会相川支部とのことで、こちらに照会してえられたという案内板の制作当時の写真が送られてきた。

「わずかな時間で滅んだ君ら 穴ぐらしの過

去、未来を圧せられ、  
五年ともたなかつた、

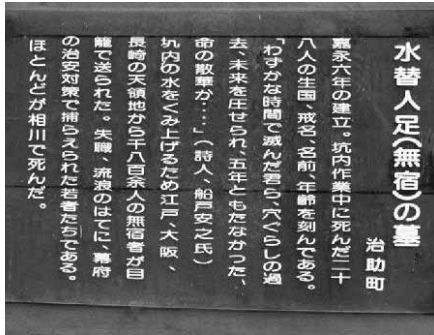
命の散華か・・・」

（詩人、船戸安之氏）

と、はっきり船戸先生の名が記されていた。

40年前にきいた恩師の詩に出会ったことに感動した。

また、正確な言葉でなくとも、詩（の調子や、



同、制作当時の写真

それを聞いて起きた感情）を覚えていたことにも驚いた。

40年も痕跡を残してしまう言葉の力というものにも感嘆する。船戸先生の詩であることは確かめられたけれど、詩の全文を知りたくなる。

僕は船戸先生には国語の時間に教わったというだけで、卒業してからはまったく交渉がなかった。高校時代の友人に電話したり、インターネットや図書館で調べてみると、船戸先生がいくつかの著書を出し、1990年にまだ若い55歳で亡くなっていることがわかった。

同級生の姉と結婚したということを知った友人がいた。僕らが高校に在学中のことで、生徒たちがひやかすと先生が顔を赤くしていたという。

その同級生を介して、船戸夫人（同級生の姉）にお会いすることができた。3年生のときに船戸先生が担任で、進路について相談し、卒業後も亡くなるまで年賀状のやりとりをしていたという友人も同行してくれて、家を訪れた。

2階が書斎で、自作が掲載された本・雑誌やその原稿が残されている。たくさんさんの著作があって、こんなにも書かれていたのかと驚いた。

船戸先生は、執筆時間を確保するために、僕らが在学した熊谷高校のあと、自宅に近い本庄高校の定時制に移った。昼間書き、夜働く。そのあと帰ってから酒を飲むということが

あり、健康を害したようだ。たくさん書いたが、書くことに  
殉じたという印象がある

目的の詩を探しだすには時間がかかるかもしれないと予想  
していたのだが、探しはじめて数分で、同行していた友人が  
「あった」と見つけだしてくれた。自作が掲載された雑誌に  
は、表紙に作品のタイトルを鉛筆書きしてあるので見つけや  
すかった。

1966年刊の「武蔵文芸」第2号に水替無宿の詩が掲載  
されていた。

### 水替無宿の墓

雪よ。

笹の葉／にも／石／にも

風ある向きにだけ／積もつては／消える。

・・・・・・・・・・・・・・・・

松太二十一歳

仙之助二十九歳

金八二十二歳

・・・・・・・・・・・・・・・・

わずかな時間で／滅んだ／君ら／穴ぐらしの過去。

未来を圧せられ／五年と持たなかった／命の散華か。

積もること知らぬ／雪よ。

それでも／江戸っ子／なんだ。／と誇示した。  
江戸。／の縦文字。

削ろうと試るな。

雪よ。

君らは／この雪を／水の音と／聞かか。

汲んでも／汲みつくせなかった／水の音と。

一月二日というに／祝ってくれる人／とてない

これからも／あるまい。

死してなお。／怨念にひしがれて／ふるえ／立つ。

廃道の墓。

佐渡相川にて

(原文では／も改行)

薄い雑誌に印刷された文字を追いながら、高校の国語の時  
間に聞いたのは「そうだ、この詩だ！」という思いがわいて  
きた。

船戸先生が、滑らかとはいえない、ブツブツと途切れがち  
の口調で、目をしばたかせながらこの詩について語る姿が、  
リアルよみがえってくるようだ。

今読んでも、いい詩だと思う。国語の時間に自作をいくつ  
も披露したという記憶はないから、先生にとっても評価が高  
い、また思い入れが深い詩だったのだろう。



船戸安之「水替無宿の墓」掲載の「武蔵文芸」第2号 1966年刊

「水替無宿の墓」が掲載された「武蔵文芸」は、埼玉県北部の同人が寄稿するローカルな文芸誌で、その詩がなぜ佐渡の観光協会の案内板につかわれたのか、不思議な気がする。佐渡市の図書館には船戸先生の著書を検索すると2冊所蔵されている。（1冊は船戸安之著『勝海舟』。もう1冊はペンネームの船戸鏡聖（ふなどあきまさ）著『ハロー・ピュッ』。著作が多いとはいえ、全国に広く知られた作家とはいええないから、佐渡の図書館に2冊所蔵されているのも不思議といえる。佐渡の文芸家と何かしら交流があったのかもしれない。



1976年の『街道をゆく』の取材のとき、司馬遼太郎一行を歴史家の山本修之助さんと山本修巳さん親子が佐渡空港

に迎えられ、佐渡を案内された。

僕が佐渡で船戸先生の詩に、いわば再会したのは、2013年9月のことだった。

そのとき須田剋太が描いた地点をめぐっていて、どこかわからない絵がいくつかあった。帰ってから山本修巳さんにお尋ねする手紙を差し上げたところ、親身な返事をいただき、再度現地を確かめるために2014年の5月にお伺いした山本邸で、司馬遼太郎や須田剋太が記帳した芳名録などを拝見したあと、案内していただいて真野を歩いた。

恋が浦の一部が埋め立てられ、須田剋太の絵にある棧橋がなくなっている。

真野湾を高い地点から見おろして描いた絵があり、泊まった高台にあるホテルからの景色のようなのだが、ホテルは解体され、高台からおりたところの道に「佐渡ニューホテル」という看板だけ残っていた。

司馬遼太郎も『街道をゆく』の文章に、恋が浦の美しさや、ホテルのことなど書いているが、風景が描かれたビジュアルな絵は、もっと直接に時間の経過をうったえてくる。

その夜、真野の宿に泊まった。翌朝、山本さんから電話があり、「きのう別のことで資料を探しているとき、船戸さんが書いた小説がのった本をたまたま見つけた」とのこと。前日、山本修巳さんには船戸先生のことについてもお話しし

たのだが、とくに承知されていることはないとのことだった。ところがその日、そのあと、たまたま「船戸安之」の名にいきあたったのだった。

再度山本邸に伺うと、その本は、「歴史読本」の1975年8月号で、船戸安之著『佐渡小比叡騒動（さどこびえいそどう）』が掲載されている。

この本じたいがちよっとした発見だったが、さらに驚かされたのは、山本修之助氏の付箋が入っていたこと。

「佐渡小比叡騒動船戸安之」とメモしてある。

歴史家である修之助氏が、佐渡の歴史に関わる小説ということでチェックされていたようだ。

山本邸を訪れたことと、船戸先生の詩に佐渡で出会ったことは別のことだったのだが、ささやかながら線がつながっ

## 須田剋太氏について

山本修巳

司馬遼太郎氏は「街道をゆく」と朝日新聞連載小説「胡蝶の夢」（副主人公佐渡出身司馬凌海）作品では島倉伊之助）執筆のため、昭和五十一年十月十七日に来島し十八日に拙宅に来訪、十九日に離島した。一行は司馬氏の夫人みどり、秘書の神木淑子、「街道をゆく」の挿絵担当の須田剋太、記者橋本申一、「胡蝶の夢」の記者柴山哲也、挿絵担当芝田米三の各氏であった。十八日は一行は拙宅に来訪、署名された。私は須田剋太氏とは気が

てしまった。

佐渡で先輩の画家が描き、恩師の作家が書いたものによれて、懐かしい思い出と新鮮な発見が同時にあった。

〔参考〕

『街道をゆく10』

司馬遼太郎／文 須田剋太／画 朝日新聞社 1978

『佐渡 山本家来訪人名録』

山本修巳編 佐渡郷土文化の会 2002

『武蔵文芸』第2号 神田書店 1966

『須田剋太の旅』 <http://www.kokuta.com/>

（埼玉県鴻巣市在住 須田剋太研究会理事）

あつて司馬凌海旧居跡の色紙をいただき、主宰の「佐渡郷土文化」表紙への了承を得た。また、昭和五十四年九月四日（火）〜九（日）までの日本橋三越六階美術特選画廊会場の「須田剋太油絵展」のカラーカタログを送ってもらった。生前親しくさせていただいた。

